札幌のスキー場と地域との関わり

高　橋　裕　子

現在，日本のスキー人口は1,500万人といわれ，数多くのスキー場が開発された。そして，スキー場の発展と地域との関わりは，その地域によって様々である。しかし，これまでの研究は，スキー場の開発によって地域が大きく変容したものを扱ったものに偏っている。つまり，開発の側からスキー場の発展の地域性を求めているのである。

札幌のスキー場は，これまで報告されたスキー場と同じように首都圏客を受け入れている反面，筆者の経験によると，地域住民が独特の形態でスキーを活発に行なう，という直接的な関わりにおいて発展してきた。そこで本文は，札幌とその周辺のスキー場を事例にして，スキー場を利用する主体の側からスキー場と地域の関わりを考察することを目的とした。以下，札幌と東京の高校生を対象としたアンケート調査，それをふまえたうえでの各スキー場の経営関係者に対する聞き取り調査により明らかになったことをまとめる。

まず，東京においては，スキー場へのアクセスは容易ではない故に，それに関する行動は多様であり，札幌では，逆に，行動が一様でパターン化している。このような違いが，スキーを行う頻度における時間スケールの差異，それによって，スキー場の様相の形成と最も関わりが深い，スキー場内外における行動・そこに求めるもの，ひいては趣向の違いまでを生じさせている。つまり，東京では宿泊を伴い，一回の活動時間は長い。そのため，観光的要素・飽きないような要素を強く求めているといえる。したがって，こうした客を受け入れるスキー場は大きな投資（宿泊施設・飲食施設・コース数の充実・アフタースキー施設など）を必要とする。いっぽう札幌ではこうした傾向は弱い。札幌圏内のスキー場は，地元客掘り起こし効果を重要視しつつ，札幌市街地が従来もつ機能（ホテル・歓楽街）を生かし，スキー場が数多く集積していることから規模（コース数など）をカバーして，多額の投資をせずして，観光スキー客にも対応している。また，各スキー場が独自のコンセプトを持っており，発展の方向性が多様であることから，札幌圏内のスキー場は様々な客に対応できる。

札幌圏内のスキー場は，スキーの起源と関連して地域住民の盛んな利用によって発展し，その人口規模ゆえにスキー場は集積した。ここに，スキー場発展と地域住民との直接的関わりがある。また，開発などの外部の大きな変容がなくても，周辺地域が有する機能と連動させることで観光スキー場としても機能するという，スキー場の発展と地域との関係がある。